

福崎町文化

第26号 平成22年4月15日 兵庫県神崎郡福崎町福田176の1 福崎町文化センター発行



柳田国男と

「コミュニケーション能力」

『柳田国男全集』編集委員 小田 富英



一、はじめに

私は、昨年三月、定年まで一年を残して、三十六年間の小学校の教員生活に終止符をうった。最初のうちは、淋しくはないのかとか、全うして欲しかったと言われていたが、辞めてからこそ広がる人生もあり、その決断に悔いはない。そして、その理由のひとつに、この一年間に二回も、柳田の生まれ故郷の福崎でお話することができたことがある。今回のこの原稿で、三度目となり、悔いがないどころか、幸せさえ感じているほどである。そこで、今の私の一番の関心事を中心に述べさせていだこうと思う。

現代の教育課題は、多種多様であり、また、日を追うごとに新たな問

題が噴出してくるかのようなのである。

しかし、私には、現代の一番大きな課題は、何と言っても、ただひとつ「コミュニケーション能力の低下」からくる問題に見える。最近話題の「言語力の低下」も同じ意味である。そして、それは、子供に限らず、どんな世代においても、どんな職種においても言える共通の課題であると思うのである。

この問題意識から、「柳田国男とコミュニケーション能力」について考えてみたい。

二、「言葉あわせの術」の達人

私は、柳田を紹介する時に、「村の信仰」（『私の哲学』思想の科学研究会編、中央公論社、昭和二十五年一月刊。刊行中の『柳田国男全集』第三十二巻に収録）というインタビューを引用することが多い。それは、内容的にも話題性に富むということだけでなく、柳田の生前、それも教育から立て直そうと活動し始め、再

び時代の表舞台に登場してきた時期のもので、なおかつ活字になる前に柳田が目を通して可能性が高いためだ。その「村の信仰」には、簡単に、しかも的確な表現で柳田の経歴が語られている。さらに、その経歴のあとに、次のような文章の柳田紹介が載っているのである。

「柳田国男氏は、言葉あわせの術に達した人である。年齢と立場とにかかわらず、相手の話を直ちに了解して、それを核として、自分の話をされる。若い者の話を、これほど早く、正しくのみこむ老人を他に知らない。」

言い替えれば、柳田は、「コミュニケーション能力」の達人ということである。

話は変わるが、昨年の「柳田国男の会」（年に一回集まっている柳田国男研究者の集い）の席で、鶴見太郎氏とこの話になった。私は、「多分、お父さん（鶴見俊輔さん）がインタビューをしたと思われるので、この紹介の文、とくに「言葉あわせ」という言葉は誰が作った言葉なのか聞いてみてください」とお願いをしたのである。しばらくして、太郎氏から葉書が届いた。それには、「家に帰ってすぐ父に確認したところ、

取材記録を編集する段階で鶴見俊輔が考えて入れた」と書いてあったのである。鶴見俊輔の柳田像ということになる。これでまた、本文の魅力が倍増したと、私は思う。

では、柳田国男は、どのような過程で、「コミュニケーション能力」の達人になり得たのであろうか。私には、柳田にもともと備わっていた個性、天性の他に、大きく二つの要素があるように思える。ひとつは、柳田の一貫した「話す・聞く」を重点とした国語（日本語）教育論、言語論である。そして、もうひとつが、旅を基礎とした柳田民俗学の体験の蓄積である。後者については、この一月の「福崎発 旅の学校」での講演「柳田国男の旅行道」で、大正九年の「豆手帖から」の旅の中の「子供の眼」の文章を紹介しながら、「目は心の窓」の「コミュニケーション能力」についてお話をさせていただいたので、ここでは、前者について述べてみたいと思う。

ここで述べる「一貫した」とは、教育体制も理論も方法も正反対の戦前、戦後も変わらずという意味である。では、どのように「一貫」しているのか、いくつかある具体的な例の中から二点に絞って論じてみたい。

三、「聴き方」教育の一貫性

柳田が、国語教育に提言し始めていくのは、方言や昔話の採集を続けながら、その採集協力者に多くの教員たちが集ってきたことと無関係ではない。時期的には、昭和初期であり、その蓄積は、「昔の国語教育」（昭和十二年七月）として結実している。それは、近代学校教育における国語教育（私たちは「学校国語」と呼ぶ）を批判し、近代以前（前代）の普通の文字を持たない人々の伝承世界に言葉の教育の真髄を「発見」（庄司和晃氏）した論文である。柳田はその最後を次のように締め付けている。

「つまり「聴方」といふ課目を大切にすればよいので、それも仮設の空な言葉でなく、出来るだけ生きた実際のものを聴かせなければ身にはならぬ。（略）言葉を人生に役立たせる為に、我々は国語教育をして居るのだといふことを、全部の当事者が三省して見なければならぬ」

柳田が、「聴く」ことを重視したこの時期のエピソードがある。昭和八年一月に、「人情地理」という雑誌が創刊されている。その創刊号で、「耳で聞いた話」を全国から集める

という「呼びかけ」が載ることになる。「柳田国男先生選」と入った「呼びかけ」は、柳田の意図に反して、地方に埋もれている珍しい郷土色豊かな話とされてしまった。案の定、集まったのは、柳田の望んでいたものではなく、がっかりしたのである。柳田は、三月号に「我々の望むもの」という次のような一文を掲載することになる。

「『耳で聞いた話』の新しい計画は言語写生の興味を流行させたいといふに在ったのです。子供でも老女でも又は路傍の人々でも、最も単純な者の話した通りを、聴いて感じたまゝ、に書き現はす技術を、読者諸君の間に競争していたゞきたいと思つたのです。（略）とにかく『耳で聞いた話』は簡単明瞭な、むつかしい言葉のまじらない会話です。」

「聞く」を後半、「聴く」と変えている点も注目だが、編集者の誤解から生じたトラブル解消のために、柳田の本音がわかりやすく出ているところがいい。柳田は、この文のなかで、「或農夫の茶飲み話」「祖父が私に聴かせてくれた話」「汽車で隣席の人がしやべつて居た話」という三例を示し、いい話が集まったら、

一冊の本にして世に伝えたいと希望を述べている。ここに、明治四十四年、「願はくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ」と刊行した「遠野物語」と共通する柳田の思いを読みとることができると思うのだが、このことは、筆を改めて述べることにしたい。

「言葉を人生に役立たせ」るためにも「聴き方」教育が重要だとする柳田の国語教育論は、戦後の国語教科書づくりにも生かされ、柳田の「一貫」性は持続する。そして、その教科書（東京書籍『新しい国語』）も、昭和三十年代に入ること、知識注入主義の「学力信仰」に負けて消えていく運命を辿るのである。

柳田は、この時、「聞きことばの将来」（『ことばの講座』第二巻、東京創元社、昭和三十一年七月。『柳田国男全集』第三十三巻に収録）という一文を書いている。

「今後、どのようにしていったらよいか。私はまず聞きかた教育ということをあげたい。そのための教科書を作るといふことはできないけれども、教科書の前後に、いう者が聞く者に対して義務を負うような気持で話する。もちろん相手は理解をするということを限度に

して、これをまず説きたいものだと思う。それには一つだけこつがあつて、それさえすればいいと思ふのは、聞き手が「わかりません」という聞きことばを「あなたのおっしゃることはわからない」ということを、ごく気楽に口に出すことができたなら、この問題は解決されていくものと私は信じている。」

このように、昭和の初期から提言してきた「聴き方」教育の現状は、いつも、柳田の思いとはほど遠いところにあつたのである。

四、柳田言語論の一貫性

前述の「昔の国語教育」も含めた柳田の国語教育論を収めた「国語の将来」が刊行されたのは、国策として「国語の愛護」が叫ばれていた昭和十四年のことである。この書の序となる「著者の言葉」は、薄っぺらい「国語の愛護」論を「この日本語をどうすることが、愛護であるかといふ点について、いつもよそ行きの語を使はなければ、愛護で無いとも思つて居るらし」人々が多く、それは「むだと言はうよりは寧ろ有害」と批判して、次のように言い切るのである。

「私は行く行くこの日本語を以て、

言ひたいことは何でも言ひ、書きたいことは何でも書け、しかも我心をはつきりと、少しの曇りも無く且つ感動深く、相手に知らしめ得るやうにすることが、本当の愛護だと思つて居る。それには僅かばかり現在の教へ方を、替へて見る必要は無いかどうか。すくなくとももう一度、検討して見る必要があると思つて居る。」

現在でも通用するものの言い方で驚くのは私だけではないはずだ。柳田の「言ひたいことは何でも言ひ、書きたいことは何でも書く」教育は、戦後の「学校国語」の目標でもあったが、いつも不十分のまま、その上反省も無く目先を変えて流れ過ぎてしまふのである。

「聴き方」教育と同じように、この柳田の言語獲得論は、戦前戦後を通じて、これも「一貫」していた。

柳田は、国語教科書づくりの頂点の時期、「思い言葉」というキーワードを提示しながら、次のようなメッセージを投げかけている。

「国語教育は昔から読み方と書き方の教育のみを重視してきて最も根本的なものを忘れていた。それは「思い言葉」の教育である。(略)すなわち自分の思いまたは感ずる

ことを、その通りに言葉で表現させる教育のことである。」

これは、昭和二十六年七月四日の「朝日新聞」学芸欄に載った「思い言葉」(『柳田国男全集』第三十二巻収録)と題する文である。続けて「言語に絶する」とか「いうにいわれぬ」という言葉を使いたがるが、それは、「思うことを思うようにしやべる」教育をしてこなかった従来

の国語教育の罪であると断罪し、「それがついに「言語に絶する」思いの敗戦に導いたことを考えると、「思い言葉」の国語教育における必要性が痛感されるのである」と結んでいる。

さらに、前述の「聞きことばの将来」とほぼ同じ時期に発表した「今までの日本語」(『教育研究』昭和三十年一月、「柳田国男全集」第三十三巻収録)では、漢語や翻訳語などの難しい言葉で理解したと思つているから、「僅かなボスの金銭や宣伝の力に動かされて投票するようになる」のだと述べ、次のように言う。

「すなわち国語をもう少し口語で表現し、口語で直ぐ受け取れるように改良しないならば、日本の国はもつと悪くなるであらうと私は考

ている。」

では、どうすれば国の滅亡を防げるのか。柳田は、国語教育の現場に立つ教員たちに、「これだけのことは暗記して帰れとか、或いは読めれば国語は満点だ」と言う教育ではなく、「耳で聞いたことが直ぐ腹の中に入つて一つの事実の認識」になるよう「人間を正しく判断させる力」を子供に養うことを望むと力説するのである。

これらの文章を発表したのは、柳田八十歳前後のことで、「今となつては残念ながら年寄の世迷言」と述べるにいたつて居る。この時の柳田の悔しさに共感することなしに、現代の重要課題「コミュニケーション能力の向上」の道筋は開けないと、私は強く思う。

五、「思い言葉」を豊かに

そして、私たちは、このスタート地点を確認した上で、新たな模索に乗り出さなくてはならない。ヒントは、「思い言葉」の復権であらう。

私は、柳田研究を続けるなかで、庄司和晃という希有な教育学者でもあり実践者に出会うことができた。そして、庄司の提唱する全面教育学に賛同する仲間たちと全面教育学研

究会を立ち上げ、現在に至っている。本文中の「私たち」とは、その研究会の同志たちを意識しているのと同時に、「三段階連関理論」という論理学の理論があるが、この柳田の「思い言葉」を三段階の中間段階と位置づけると、「コミュニケーション能力」の構造が見えてきて納得してもらえらると思う。

その三段階とは、「感じ言葉」↓「思い言葉」↓「考え言葉」である。そしてこの「↓」には、段階を上げるため、「どうして」とか「なぜなら」とか「比べてみると」や「ひと言で言う」となど多彩な「きっかけ言葉」があるのである。子供も大人もこの連関のなかで自在に行つたり来たりすることで、自然と「言語力」が付き、「コミュニケーション能力」は向上していくとの確信に至つたのである。こうして得た実践例については、また別の機会に改めて述べさせていたたくこととするが、いずれにしても、私たちは、柳田という「言葉あわせ」の達人から、まだまだ多くのことを学ばなくてはならない。